

## なぜ、「はるちゅうタイム」に取り組むのか

(岸和田市立春木中学校研究部)

令和2年3月からはじまった、新型コロナウイルス感染症による3か月間の臨時休業は、子どもたちの生活を一変させました。

臨時休業が長期化したことで、授業時数の確保や、学力の保障について、さまざまな議論がなされました。しかし、本校では、「孤立しがちな子どもをさらに孤立させる」ことが、より大きな問題だと考えました。

具体的に言うと、ふだんから SNS 等を使って、積極的に誰かと関われる子どもは、臨時休業の間も、友人との「つながり」を広げていきます。

しかし、人と関わるスキルが弱い子どもや、そのようなツールを持っていない子どもは、知らぬ間に、まわりとの距離ができてしまいます。そして、その現実を、臨時休業明けの登校日にクラスで知ってしまうとしたら、こんな悲しいことはありません。誰だって自分が一人だなんて、思いたくはありません。

本校では、令和2年5月18日の分散登校による登校日から、「はるちゅうタイム」をはじめました。これは、名城大学の曾山和彦教授が推進している「スリンプル・プログラム」をもとにした活動です。安心・安全な枠や型を設定して、人との関わりを楽しみながら、「自尊感情」と「ソーシャルスキル」を高めることをねらいとしています。「自尊感情」も「ソーシャルスキル」も、「かかわりの力」を育むうえで欠かせない要素です。

「スリンプル・プログラム」は、2つの活動で構成されています。前半は、ソーシャルスキル・トレーニング（SST）で、後半は、構成的グループエンカウンター（SGE）です。定着をめざすソーシャルスキルは、「あいさつ、うなずき、指示を聴く」の3つです。構成的グループエンカウンターの部分で大事にしているのは、教師の指示を聴く「インストラクション」と、気づいたことや感じたことを共有する「シェアリング」です。10分間で、SGEのねらいのすべてを実現するのは難しいですが、回を重ねることで、本音を語れる土台をつくるようにしています。

令和2年度は、合計で33回の実践を重ねました。

毎週水曜日の始業前の10分間を使い、「あどじゃん」「二者択一」「質問じゃんけん」「いいとこ四面鏡」「1分間スピーチ」の5種類のエクササイズを繰り返しました。

回を重ねるごとに、活動が子どもたちに馴染んでいき、自然な笑顔が見られるようになりました。そして、かかわりの輪の広がりが、QU等の調査結果からもわかりました。何より、約9割の生徒が、「はるちゅうタイム」を支持しています。これは、教職員にとって、大きな力になりました。

令和3年度は、さらに、子どもたちの「かかわりの力」の向上をめざします。